

玉の泉（月桂冠）

1637 年、大倉治右衛門（1615-1684）によって設立された月桂冠（文字通り、「月桂樹の冠」）は伏見で最も有名な蔵元の 1 つであり、世界で最も古い企業の 1 つでもある。治右衛門は伏見の南浜にあるウォーターフロントエリアに定住し、京都の生家にちなんで名付けられた酒屋笠置屋を開店した。彼は「泉の宝石」を意味する彼自身の銘酒、玉の泉を醸造した。

月桂冠は 1868 年 1 月、鳥羽伏見の戦いで伏見に起きた戦火を逃れ、明治時代（1868～1912 年）には米価が上昇したにもかかわらず繁栄した。

大倉恒吉（1874～1950）は、治右衛門の次男（生没年不詳）であった。彼は 13 歳の若さで、蔵元の 11 代目の当主として家業を引き継ぐことを余儀なくされた。父親から役立たずの少年と評された恒吉は、伏見だけでなく全国の酒造りに革命を起こした。恒吉は会社の正式な責任者であるにもかかわらず、まずは杜氏の見習いとして働いた。彼が青年となったころには、酒造りを近代化するさまざまな方法を試していた。彼の技術への最大の貢献は、瓶詰めと低温殺菌に関連する科学技術の導入で、これにより腐敗が大幅に減少し、今もなお業界で使用されている。1800 年代まで、同社は年間約 90 キロリットルの酒を生産していたが、恒吉により生産量は 100 倍に増加し、約 9,000 キロリットルになった。

つつましい創業から、月桂冠は知名度が上がり、1988 年に Gekkeikan Sake USA がカリフォルニア州フォルサムに設立された。